



谷 甲州

遙かなり

神々の座

KOSHU TANI

早川書房

遙かなり神々の座
谷甲州

早川書房

検印廃止

遙かなり神々の座

一九九〇年八月二十日 印刷
一九九〇年八月三十一日 発行

著 者 谷 甲 州
た こうしゅう

発行者 早 川 浩

発行所 株式会社 早川書房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田多町三ノ三

電話 東京(五三三二)六代表

振替番号 東京・六一四七九六番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

定価はカバーに表示しております

Printed and bound in Japan

印刷・製本／中央精版印刷株式会社

ISBN4-15-203443-2 C0093

遙かなり神々の座

目次

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
越境	攻撃部隊	キャラバン	カトマンドウ	摩耶	遠征計画	事務所 ^{ルム}	君子	氷の道	赤い霧
148	134	117		82	70	54	35	22	9
			100						

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
ニマ・ノルブ	再会	ネパール領	国境地帯	戦線	君子と摩耶	潜行	東京	チベット高原	逃亡	掃討	裏切り	下降
338	319	307	296	278	261	245	235	219	206	192	178	160

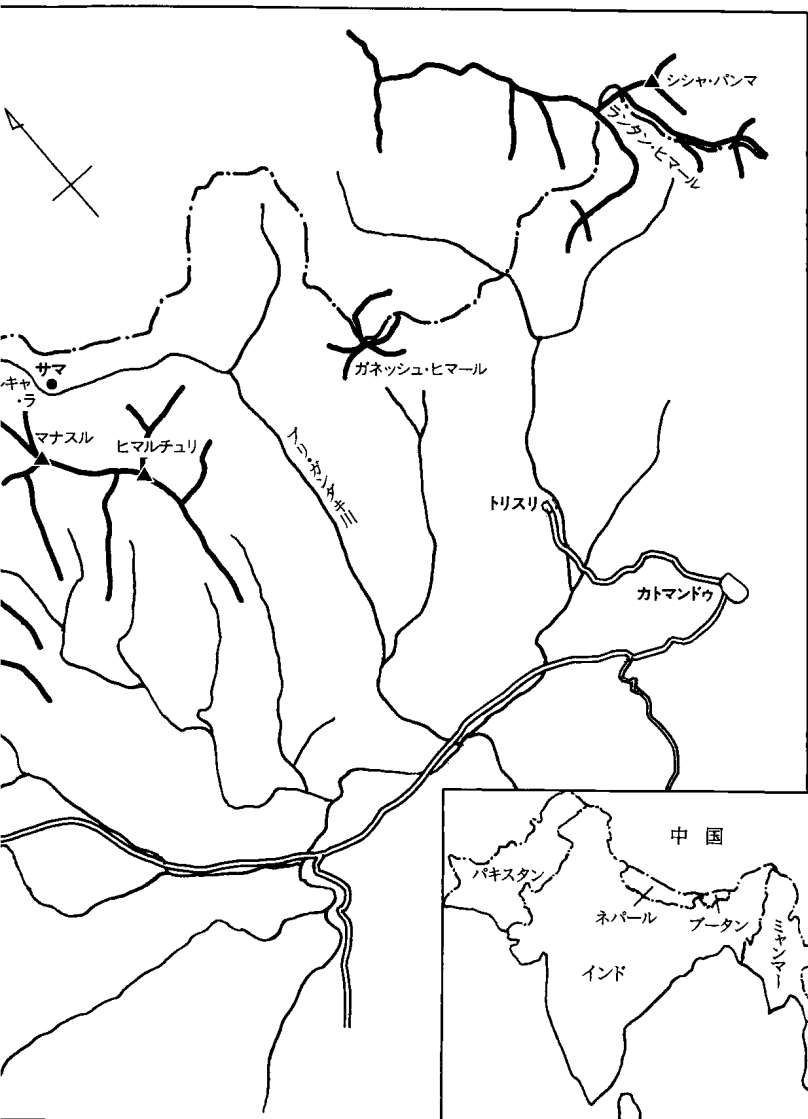
26 25 24

デ
リ
ー
航
空
部
隊
襲
撃

379

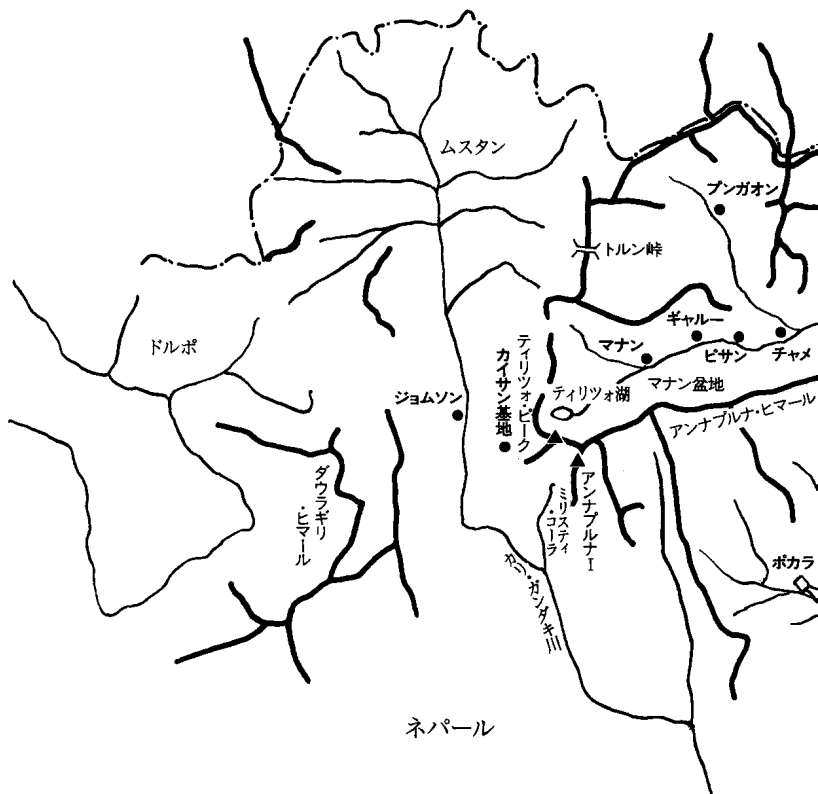
350

369



-  山稜
-  川
-  国境
-  自動車道路

中国



〈用語解説〉

克蘭ボン……氷雪上を歩くために登山靴などに装着する爪のついた金具。アイゼン。

カラビナ……ピトン（ハーケン）等とロープ（ザイル）を連結する軽合金製のO型またはD型の環で一部が開閉するようになっている。

アイスアックス……氷を砕いたり、削るなどして氷雪上に足場を刻むためのアックスと氷河などの登降の補助をする杖との一体化したもの。ピッケル。

アイスバイル……ピトン（ハーケン）を打つためのアイスハンマーの柄の末端に石突のついたもの。ピトンを打つ面の反対側が鋭いビック状になっている。

ナッツ……チョックと呼ばれる六角形や楔形の軽合金製の登攀用具の一種で、ピトンを岩壁に打ち込むかわりにクラックにこれをはめこみ登攀の助けにする。工業用ナットを流用していたところからきている。

サイドモレーン……側堆積。氷河に落ちこんで下流にはこぼれた砂礫や岩屑が、氷河本流の両わきにとりのこされてできた堤防状の堆積。

ゴルジュ……兩岸が切り立った廊下状の溪谷。喉の意。

チョータラ……旅人のための休み場。村はずれや街道の道端につくられている。通常は菩提樹のまわりに石組みを積み上げ、背負った荷物を乗せる台と日陰を旅人に提供する。

ダルワ・スルワ……ネパール人男性の正装。前あわせを紐で結ぶ丈のながいシャツと、股引きからなる。正式にはこの上から黒い胴着を着るが、スーツの上着を着ることも多い。

1 赤い霧

夕暮れがあたりにせまるころになって、雪峰をおおいかくしていた雲が切れた。

滝沢育夫は、手にした双眼鏡を氷河の上部にむけた。そのまま、ゆっくりと視線を移動させていった。氷河にむかって落ちこむ雪壁から下部の緩傾斜帯にかけて、丹念にみていく。この三日間、雲にかくされていた氷河の全貌を、今ははっきりとみわたすことができた。

今日は比較的あたたかく風もなかったが、それでも日なたの氷がとけることはなかった。そしてみじかい日照時間のあと、気温は急速に下降していった。羽毛服をきこんでいても、寒気が骨までしみとおるようなほどだ。シングルの手袋しかしていないものだから、指先の感覚がたちまち失われていった。

滝沢の手が、かすかにふるえた。視野の中央に、小さな点がみえていた。注意していなければ見失いそうなほど、目だたない点だった。真っ白な氷河の中央付近に、ぼつんとその点があった。

登攀ルートを確認したときには、気づかなかった点だった。だとすると、あれがそうなのかもしれない。場所からいっても、その可能性はたかい。

——あるとすれば、あのあたりだ。雪壁から氷河上に落下し、そのまま氷河を滑落して、傾斜のゆ

るくなつたあのあたりで軟雪に引つかつたとすれば。

滝沢はそう考えた。そしてさらに、その点を注視した。だが、すでに暗くなりはじめた氷河上で、芥子粒のような点をみわけるのは容易ではなくなっていた。

視界の中を、霧が通過した。滝沢は、辛抱よく双眼鏡をかまえたままでいた。一度その点をはずしてしまふと、次にみつけるのはずっと困難になる。それを知っていたから、双眼鏡を保持したままその点のみえたあたりを凝視していた。

今のところ、天候が悪化するきざしはなかった。むしろ明日からの数日間は、比較のおだやかな日がつづくだろう。そしてそれは、彼に与えられた最後のチャンスになるはずだ。

数秒後に、視界は回復した。黒い点は、まだそこにあった。まるで滝沢に、発見されるのを待っていたかのように。

滝沢はようやく納得して、双眼鏡をおろした。少なくとも、その場所まで登ってみる価値はある。天候さえ安定していれば、二日くらいで往復できるだろう。雪の状態が、それほど悪くなければだが。明日からの行動を考えながら、下方のベースキャンプに眼をむけた。彼の立っている大岩のすぐ下に、ベースキャンプは建設してあった。ベースキャンプといっても、小さなものだった。テントが三張り、と、野積みしてシートをかけた隊荷の山があるだけだ。なかば雪にうもれたテントのひとつに、声をかける。

テントのひとつがもぞもぞと動いて、雪焼けで真っ黒になった顔が突き出された。隊の中で、一番若い原田だった。もともと四人いた隊員のうち、残っているのは彼と滝沢だけだった。一人は三日前に埋葬をすませ、もうひとり死体さえ発見できていない。彼らのほかには、インド政府から派遣された連絡官と、ネパール人のキッチン・ボーイがいるだけだ。

原田は無言でテントからはいだし、滝沢のところまで登ってきた。いつもは軽口ばかりたたいっている原田だったが、さすがにここ数日は元気がない。羽毛服の前をかきあわせ、寒気に顔をしかめている。その顔も、雪焼けの上に軽い凍傷にまでやられているものだから、どす黒く変色していた。右足は、軽いびっこをひいている。

顔を雪峰にむけたまま、滝沢は双眼鏡を差し出した。原田は黙ったまま双眼鏡をかまえ、滝沢の指示方向に焦点をあわせた。しばらくのあいだ一点を凝視したあと、ぼつりといった。

「たぶん、奴でしょう……。場所からしても、まちがいなさそうだ」

それから、滝沢の顔をみていった。

「明日、登りますか？」

滝沢は首をふった。結論は、すでにだしていた。

「ベースの撤収を、のぼすわけにはいかん。お前とリエゾンは、予定どおり明日下れ。俺は、あの場所まで登ってくる。たぶん二日くらいで、降りてこれるだろう。急いで追いかければ、最初の村までにはキャラバンと合流できると思う」

明日になれば、ベースキャンプ撤収のためのポーターが到着する。最奥の村からここまで登ってくるには、空荷のポーターでも丸四日かかる。今から下山日を変更するのは不可能だし、この場所待たせることもできなかった。貧弱な防寒具しか持たない彼らにとって、ここは死の世界なのだ。

しばらくしてから、原田がようやくいった。

「俺もいきます。キャラバンなんて、リエゾンにまかせとけばいいんです。俺がついていくこともないでしょう。キャンプの撤収をみとどけてから、二人で登りましょう」

滝沢は、雪峰に眼をむけたまままでいった。

「今のお前には無理だ。また登ったりしたら、足の指を何本かなくすことになるぞ。下手すりゃ足ごとなくなる。ペースまで這いずって帰ってきたのを、もう忘れちゃったのか？」

そういったきり、滝沢はだまりこんだ。原田はそれでもまだ何かいたそうにしていたが、滝沢の不機嫌そうな表情をみてだまりこんだ。

すでにベースキャンプのあたりは、暗くなりかけていた。だが、二人の見上げる雪峰は、残照の最後のかげやきを受けて黄金に染まっている。その残照も、次第に上方にせり上がり、やがて頂部の一点だけを残して雪峰は色彩を失っていった。彼らの挑戦を、いともあっさりとしりぞけたピークは、人間の存在を拒否するかのようになり、傲然と屹立していた。

気まずい沈黙が二人をつつんでいった。そして雪峰の頂からも残照が消えようとするころ、原田が思い切ったようにいった。

「いや、やっぱり俺もいきます。あれくらいの高度なら大丈夫だと思うし、自分の足のことは自分で責任をとります。それにこいつは、俺の——」

「足手まといなんだよ！ お前がきても。それに、お前みたいな半病人をつれていったら、俺までやばいことになるんだ。命がおしかったら、いわれたとおりにしろ」

原田は唇をかんだ。どうしようもない無力感が、この若いクライマーをとらえていた。滝沢は、ようやく雪峰から原田に視線をうつしていった。

「気持ちにはわからんでもないが、どう考えても今のお前は登れる状態じゃない。それにこれは、俺の好きでやることだ。お前をまきこむわけにはいかん。」

そういうことだ。お前はキャラバンといっしょに下れ。リエゾンひとりに、キャラバンをまかせるわけにもいかんだろう。ドジな隊長だったが、最後の勝手をきいてくれよ」

原田はようやく笑顔をとりもどした。

「……わかりました。でも、気をつけてくださいよ。俺ひとりで、隊長の分まで葬式をだすのはいいですよ」

いつもの脳天気な原田のいい方に、滝沢もつられて笑った。どこか、ふてくされたような笑い方ではあったが。

——八〇〇〇メートル級のピークを、冬季に登頂できないものだろうか。

山仲間が集まった酒の席で、だれかがそんなことをいいだしたのがきっかけだった。最初はいいだした本人も、冗談半分だったはずだ。それほどこの計画は破天荒で、画期的なものだった。その計画に滝沢が加わるようになったのは、五年あまり前のことだ。

その当時——一九七〇年代の中ごろには、ヒマラヤにおける冬季登攀の例はほとんどなかった。わずかにポーランド隊による記録がいくつかある程度で、唯一の成功例は七五〇〇メートル級のピークだった。八〇〇〇メートル級となると、試登の記録はあっても成功例はなかった。

一般的にいつてヒマラヤの登頂期は、東部ヒマラヤなら春と秋に、モンスーンの影響をうけない西部ヒマラヤなら夏期にかぎられていた。七〇〇〇メートルに満たないピークを除外すれば、最初から冬季に登攀期間として限定する隊などなかった。それほど冬季のヒマラヤは、条件が悪かったのだ。

まず冬季のヒマラヤでは、ベースキャンプを建設すること自体が非常な困難をとまなう。冬季、山岳民族の生活圏は低高度地帯に後退し、ベースキャンプまでの道は雪にとぎされる。大量の積雪は、ただでさえ未発達なヒマラヤ山麓の交通を途絶させ、住民は冬村にこもって春がくるのを待つ。春や秋のシーズンなら容易に集めることのできるポーターも、冬季にはなり手がなくなる。

事実、滝沢たちの隊は、通常の二倍以上の賃金と、防寒具、靴の支給を条件に、ベースキャンプまでの隊荷輸送を引き受けさせたのだ。ほかの季節ならポーターたちが裸足で歩く道を、滝沢たちがラッセルした道を通らせて。

その次に、悪天候があった。インド・ヒマラヤでも、ネパールに近いガルワールでは、冬のモンスーンの影響をもろに受ける。大陸中央部からベンガル湾にむけて吹き出す季節風は、それほど多くの降雪をもたらすことはない。むしろ上部においては、他の季節より積雪が少ないほどだ。しかし上部に積雪が少ないのは、殺人的な強風のせいだ。山様を変えてしまうほどの勢いで吹き荒れるジェット気流が、積雪をことごとく吹き飛ばしてしまうのだ。

さらに日照時間の短いことと、猛烈な寒気がこれに加わる。一日のうちに行動できる時間はみじかく限られ、極端な低温と異常に乾燥した空気はクライマーの体力を消耗させる。他の季節なら比較的登りやすい雪壁は、蒼く凍りついた氷壁と化して登攀をはばむ。寒気と稜線上の強風は文字どおり殺人的で、中途半端な防寒装備を使えばたちまち手足や顔面を凍傷にやられる。

だが、五年前には破天荒と思えたこの計画も、時がたつにつれてそれほど珍しくなくなっていた。彼らの計画が本格化した途端に、ポーランド隊が最初の冬季八〇〇〇メートル峰登頂に成功した。しかも最初の冬季登頂は、エベレストでおこなわれたのだ。それ以後、冬季の登攀は、多様化するヒマラヤ登山のひとつのスタイルになっていった。

この五年の間に、計画は最初の構想からどんどん変化していった。さまざまな事情で当初のメンバーは遠征計画からはなれ、かわりに経験のすくない若いクライマーが加わった。最初のメンバーで残っているのは、あまり積極的ではなかった滝沢だけだった。こんなチームでは、冬季の八〇〇〇メートル級など思いもよらない。目指すピークはガルワール山城の七〇〇〇メートル級に落ち着き、滝沢